

祖母の子育て参加における 子育ての捉えなおしに関する臨床心理学的研究

GH081005 : 笹 川 裕 美

指導教員 : 吉田ゆり准教授師

問題と目的

人間関係において両親や友人が重要であるということは多くの研究で指摘されているが、祖父母もまた重要な他者であることが指摘されるようになった。特に子育て支援領域では、中高年女性の豊かな経験を生かした子育て支援の重要性が示されている（宮中ら，1996）。中高年女性として、祖母が挙げられるが、祖母は、子育て支援の重要な資源の1つとして考えられている（三輪ら，2006）。

祖母の子育て参加，子育て支援に言及した研究はいくつか散見でき，祖母の子育て参加が祖母自身に与える影響，そして育児をする母親に与える影響を量的に検討した研究が主に見られる。これらの研究では，祖母の子育て参加，子育て支援は，祖母及び母親に肯定的に受け取られ，双方に良い影響を与えていると明らかにされている（八重樫ら，2003；松岡ら，1996；宮中，2001；杉井ら，1996）。一方で，母親と祖母の間には，子どもに対する関わり方に違いがあり，葛藤や困惑を感じているなどの否定的な側面も挙げられている（角川ら，2006）。今野（1982）は，母親による子育てと祖母による子育て（孫育て）との間にかなりの摩擦があると述べている。

以上より，祖父母の子育て参加，子育て支援に関する研究においては，量的な検討だけではなく，質的な検討が必要なのではないだろうか。

そこで，本研究では，子育てに焦点を当て，祖母が，親世代の子育てへの参加，孫との関わりを通して，自身の子育てをどのように捉えなおすかについて，捉えなおす過程にも着目し，質的に検討することを目的とする。

方法

研究協力者 祖母3名。

データ収集方法 半構造化面接。

調査時期 2009年12月。

手続き 事前に文書にて，本研究の目的及び概

要を説明し，面接の同意を得た。同意の得られた研究協力者には，再度口頭で説明を行った。面接は研究協力者の自宅で行われた。許可を得た上で，ICレコーダーに録音し，逐語文字化を行い，分析の資料とした。面接の実施回数は1回，実施時間は1～2時間であった。

質問項目 本研究の目的に沿うように以下の質問項目を設定した。1. 孫の人数，2. 子ども及び孫との居住形態，3. 交流頻度，4. 祖母自身の子育て経験について，5. 親世代の子育てについて，6. 自身の子育てを振り返って思うこと，7. 親世代の子育てへの関わりについて，8. 孫との関わり，という8項目を設定した。面接は，できるだけ自然な会話形式でやりとりがなされるように努め，研究協力者から質問項目に関する語りが自発的に出てきた場合は，その語りを尊重した。

分析 逐語録から，質問項目に沿った内容や語りの特徴からデータを区分し，コード化を行った。その後，類似する内容を整理，統合し，カテゴリーを生成した。以上の作業は，全て筆者が行った。

結果と考察

生成されたカテゴリー 「子どもとの関わり」，「変わらない子育て」，「子育ての経験」，「子育て時における地域との繋がり」，「教えてもらったことへの感謝の念」，「子育ての工夫・努力」，「親世代に伝えてこなかったことへの反省」，「幼少時の経験」，「昔の良さを思う」，「祖母世代と親世代の違い」，「我慢している祖母世代」，「親世代との意見の相違」，「子育て経験の伝達」，「親世代の子どもへの関わり方」，「親世代に対しての思い」，「親世代の態度」，「孫への思い・関わり」，「祖母としての反省」，「孫との交流」，「孫に対する不安」，「家族の変化」，「前世代の良さ」，「子育てへの支援」，「親世代・子育ての変化」，「自身の祖母からの繋がり」，「子育ての終了」，「子育ての大切さ」，「親世代への不満」，「親世代との関係」，「親世代

の状況と変化」,「書物通りにいかない子育て」,「孫の変化」,「祖父母に対する孫の関わり方」,「責任がない祖母」という34カテゴリーが生成された。

各事例の検討と考察 Aさん:親世代の子育てによく参加し、Aさん自身の子育て経験が親世代に頻繁に伝達されている。Aさんの子育て経験は、親世代に肯定的にも否定的にも受け取られている。そして、親世代への子育て参加を通して、親世代と、自身の子育て時との違いを感じ、考え方や意見の相違が起こっている。同時に、自身の子育てを再体験している。地域との繋がりが密であったこと、前世代から子育てについて大切なことを受け継いできたことなど、自身の子育てについて比較的肯定的な評価をしている。しかし、子育てにおける大事なことを親世代に伝えてこなかったという反省も多く語られている。

Bさん:親世代の子育てによく参加し、孫との関わりも密である。親世代との意見の相違も見られ、特に食事前におやつを孫に与えることや排泄等の生活習慣に関して、親世代との間にずれが生じている。食事前のおやつに関しては、祖母として、可愛い孫におやつをあげたいという気持ちが強く、育児をする母親とは違いが現れてくる場面であると考えられる。Bさんは、祖父母に育てられており、Bさんの子育て観、祖父母像に影響していることが推測される。

Cさん:頻繁に子育てに参加している。そして、母子支援の手伝いに入っていることもあり、自身の子どもだけではなく、現在の親世代そして若い世代の日常生活でのあり方や、人との関わり方について、疑問を感じている部分も多い。親世代との意見の相違もあるようだが、それ以上に、現在の親世代に対する不満や多少の怒りもあるのではないかと考える。このような状況に対し、自分自身が親世代に伝えてこなかった事を反省しているが、その後、子育ては終わったと述べている。現状に一種の諦めさえも感じられる。結果として、Cさんは、今よりも、自身が子育てをしていた頃が良いと語った。親世代の意識の変化や、情報を得ようとしない親世代の姿勢などが、昔の良さを感じさせるのではないだろうか。

共通するカテゴリーからの検討と考察 3人に共通するカテゴリーから考えられるのは、3人の育て方や考え方は、自身の子育て時の経験が元

になっていること、それぞれに子育て観があるということである。そして、自身の子育てを肯定的に評価しており、自信と責任を持っていると考えられる。反対に、親世代の子育ては、祖母の立場から見ると、育児書や子育ての本を読みながら行われているように見えるようだ。

総合的考察

本研究は、祖母が、親世代の子育てへの支援や孫との関わりを通して、自身の子育てをどのように捉えなおすかについて、捉えなおす過程にも着目し、質的に検討することを目的として研究を行った。

祖母は、子育てに参加し、親世代との違いや、親世代そして子育て自体の変化を目の当たりにする。また、孫と関わる中で、孫に対する親世代の関わり方も見えてくる。孫との関わりは、基本的に孫が可愛いという気持ちが大きく、自らも孫には責任がないと述べている。

そして、自らの子育て経験を振り返り、親世代に伝達していく。子育て経験の伝達は親世代に、時には肯定的、時には否定的に受け取られ、祖母と親世代との間には意見の相違が生じ始める。この際に、昔の良さや、子育ての大切さを再認識していた。

祖母は、自身の子育て経験や子育ての方法を肯定的に評価している一方で、子ども達に伝えるべきことを伝えずにきてしまったと反省し、何度も同じことを述べていた。今の親世代があるのは、自分達が、伝えず、教えずに育ててしまったからだと繰り返し語られた。これは、子育てへ参加したことで、祖母自身の子育てが捉えなおされたと考えられる。

また、親世代に伝えてこなかったことを反省しつつも、自らの子育ては終わったと語り、自身が子育てをしていた時代の良さを述べる祖母もいた。

祖母の子育ての捉えなおしは、同じような捉えなおしの過程を通ったとしても、それぞれ個別の捉えなおしを行っていることが示された。

本研究の臨床心理学的意義

祖母と親が知る子育ての良いところを伝え、足りないところを補う。それが、祖母にとっても、親にとっても、そして子どもにとっても良いことなのだろう。祖母と親の間を繋ぐ。それこそが、本研究の持つ、臨床心理学的な意義だと考える。